

バイオシステム研究科

学生の確保 (人)	年次	定員	志願者		受験者		合格者	入学者	
	1年次	60 6 (60)	学内 42 (29)	学外 104 11 (93)	学内 41 (29)	学外 100 11 (83)	100 11 (91)	学内 36 (26)	学外 58 10 (59)
学生の進路 (人)	修了者	就職者	就職者の内訳			研修医	進学者	その他	
	85 11 (69)	56 5 (40)	企業 53 (34)	教員 3 (1)	公務員 - (5)				

・ () は前年度の数値を、 は外国人留学生を内数で示す。

1 バイオシステム研究科の活動

本研究科は、これまでの産業指向型の学術研究に加え、資源の活用、生命倫理を含む人間生活の質的向上、また生物の存続をも視野にいれた新たな学問体系の構築を試みる教育・研究の組織化を社会が要求したことに基づいて平成5年に設立された。創立後9年の間、専門的知識の深さより、むしろ知識や視野の広さをより重視した専門多重型の複眼的視点を学生に持たせるよう努力してきた。この成果が認められ、バイオシステム研究科には全国から学生が受験するようになり、一般学生の受験倍率は、ここ3年間の平均値で2.7倍と高い水準を維持している。また、本研究科では、学際性のみならず国際性も重視しており、日本学術振興会の拠点大学交流をはじめ、東南アジアならびにアフリカ諸国との大学間交流協定に基づく学生の受入れ・派遣や教官の国際共同研究を積極的に進めている。平成14年度の外国人学生は10名入学し、国際的評価も高まっている。

唯一の問題点である社会人学生については、教官の多大な努力にも関わらず、定員の50%を維持することが困難である。この原因は、社会人が要望する学位が修士から博士に移行しているという社会的ニーズの変化によるものである。この現状を抜本的に改革するため、社会人の定員枠を用いて博士課程生命環境科学研究科に国際生命産業科学専攻を設置し、バイオシステム研究科設立理念を継承した実務型博士の養成を目指すこととし、将来計画委員会委員の献身的努力が続けられている。

2 教員の教育業績評価の状況

教育業績の具体的な評価項目は、(1)教員一人当たりの修了者輩出数、(2)担当事業科目数、(3)年間研究業績、(4)研究科運営に関する貢献度である。しかし、各研究分野に所属する学生数に比較的大きな差が有るため、(1)、(2)の評価のみでは十分でなく、担当授業の受講生数も評価対象に加えることとした。この実施に伴って、授業時間割の見直しを行ない、同一時間帯における授業を極力減らした。

3 自己評価と課題

自己評価

平成14年度は、85名の修了生を社会に送り出し、そのうち約73%が企業、国・地方公務員として就職し、17%が本学又は他大学の博士課程へ進学した。また、留学生についても、11名が無事修了し、この内の3名は博士課程に進学した。これらの修了率および就職率は評価に値するものとする。

課題と改善の方向

研究科設立後9年が経過し、高度専門職業人の養成という役割を十分果たしてきたと考える。しかし、これからの少子化時代に学生を確保出来る魅力ある研究科を維持するためには、国際的業務に就ける実務型博士の養成が必要と考えている。これを具体化するために、開発途上国への技術移転に携える人材養成を目的とした「国際生命産業科学専攻」の設立と、この新専攻との密接な連携体制の確立について努力を続ける。